昭和薬科大学紀要
Vol.50；21-31，2016

調査報告

薬学教育６年制における早期体験学習：特別支援学校見学実習における“気づき”

堀内　正子*、神戸　敏江**

*昭和薬科大学　基礎薬学教育センター
**昭和薬科大学　薬理学研究室

Early On-site Training in the Six-year Pharmacy Education: Students' New Viewpoints on a School for Special Needs Education

Masako HORIUCHI*
Toshie KAMBE**

*Education Center for Fundamental Pharmaceutical Sciences, Showa Pharmaceutical University
**Laboratory of Pharmacology, Showa Pharmaceutical University

要　旨

昭和薬科大学（以下、本学）では、平成18（2006）年度に６年制薬学教育がスタートして以来、１年生の導入教育として早期体験学習の一つに特別支援学校見学実習が取り入れられてきた。平成26（2014）年度は旧コアカリキュラム（以下、旧コアカリ）の最後の年であるため、学生の感想文に見られる“気づき”に焦点を当て、実施したプログラムの教育的効果を探った。多くの学生たちが、特別支援学校（以下、支援学校）の存在意義を実感し、教師や児童・生徒の学びに対する真摯な態度に深い感銘を受けている。さらに本実習は学生が自分自身を見直し、将来に向けての幅広い問題意識を持つきっかけともなっている。

キーワード
薬学教育６年制、導入教育、早期体験学習、特別支援学校見学実習、気づき

Ⅰ．はじめに

平成18（2006）年４月よりスタートした６年制薬学教育は、「優れた医療人としての薬剤師の養成」を主目的とし、各大学では平成27（2015）年度より改訂版モデル・コアカリキュラムの運用が始まっている。より優れた質の高い薬剤師には、高度の専門知識・技能は勿論のこと、高い倫理性と豊かな人間性が要求され、医療人としてのヒューマニズム教育、倫理教育が6 年制教育において重要な課題になっている。多くの医療系大学（医歯薬・看護）において、導入教育として医療や福祉の現場を体験する早期体験学習が実施されているが、とくに社会的弱者（患者、高齢者、入所者、障害児・者）の施設を体

験することの意義（教育的効果）は大きいとされている[1]。

本学も平成18（2006）年度より東京都立町田の丘学園（以下、町田の丘学園）の協力を得て、新入生に対して支援学校見学実習を行ってきた。見学実習の目的は、「特別支援学校を訪問し、知的発達や身体に障害のある子供たちがどのように教科学習や日常生活の学習、作業学習、自立活動などを行っているかについて理解を深める」、「医療ケアを必要とする子供たちへの対応について理解を深める」である。見学実習に先立ち、支援学校の教諭を招いて講話と説明会を行い、見学実習終了後にはレポート課題を課しているが、これまで学生の“気づき”に関して十分な調査が行われていない。そこで、学習効果を把握し、見学実習のあり方・課題を明確にし、平成27（2015）年度以降のプログラム開発の基礎資料とすることを目的として、終了後に提出されたレポートの内容を分析し、学生にどのような“気づき”があったのかを調査した。

Ⅱ．背景

６年制カリキュラム構築の当初、福祉の現場を体験する早期体験学習として介護施設などが検討されたが、少人数などの制限があり断念せざるを得なかった（第一回薬学教養教育担当者会議議事録より）。そのため、町田市にあって、小・中・高の肢体不自由及び知的障害の併置校である町田の丘学園の協力を得て、見学実習プログラムを導入した。堀内は、平成21（2009）年度よりこのプログラムのコーディネーターに加わっている。次年度からは初期担当者の江成教授（体育学）からその任を引き継ぎ、平成24（2012）年度からは神戸講師と２名体制でこのプログラムを運営している。

最初に、町田の丘学園の概要を表１.に示す。東京都には62校の公立特別支援学校（都立57校、区立５校）が存在する（平成27年４月１日現在）。この内、肢体不自由及び知的障害の併設校は町田の丘学園を含めて８校あるが、町田の丘学園は町田市全域から児童・生徒を受け入れており、特別支援教育におけるセンター的機能を果たしている。

次に、筆者らが責任者として関わってきた実施プログラムの概要を表２．に示す。見学実習は、町田の丘学園の校長先生のご理解と担当の先生方のご協力によって実施されてきた。参加学生の数の多さでは、先生方だけでなく児童・生徒の皆さんにもご迷惑をかけてきた感は否めない。しかし「一人でも多くの人に特別支援学校を知ってもらいたい」という担当教諭の言葉は、筆者らにとって大きな支えとなっている。

７月のガイダンスでは、事前学習として訪問校の教諭に講話をお願いしている。多くの学生が、肢体不自由や知的障害のある児童・生徒と触れあったことがなく、特別支援学校や学級の存在を知らない。この事前学習がなければ、実際の見学実習の場で不適切な行動をとってしまう可能性は十分にある。児童・生徒さんや先生方の気持ちを傷つけてしまうだけでなく、学生本人もそのことによって傷ついてしまうことが起こり得る。支援学校教諭の講話は、学生たちの漠然とした不安を取り除き、一人の人として、同じ一人の人としての児童・生徒が学ぶ支援学校を見学体験することへと導いてくれる。

平成25年度までは、支援学校見学実習は本学の夏休み明け授業開始の直前３日間に実施した。各学生は、１日（午前中）のみの参加となる。本学より筆者らを含めて４名の教員が引率として参加し、グループに分かれての見学では、見学が円滑に行われるように本学教員は支援学校教諭をサポートする。見学実習終了後には、レポートの提出を課している。

表１．東京都立町田の丘学園

所　在　地	東京都町田市野津田町2003番地（山崎校舎：町田市山崎一丁目2番17号）
学校教育目標	～ひとりひとりの子どもに生きる力を育てるために～ 1　じょうぶな体と明るい心を育てる。 2　日常生活や社会生活に必要な基礎的習慣や態度を育てる。 3　すすんで遊び、学び、働く心を育てる。 4　友達と仲良く協力し合う心を育てる。 5　自分の考えや気持ちを伝え合う力を育てる。
歴　　史	・昭和47年12月設置 ・昭和50年4月より知肢併設校 ・平成27年4月より児童・生徒の増加により、山崎校舎開設　（A部門小・中）
特　　徴	・併設校（２つ以上の障害種別を併せ持つ学校） ・肢体不自由教育部門（A部門）　訪問学級（在宅訪問、病院訪問） ・知的障害教育部門　（B部門） ・文部科学省事業　「特別支援教育におけるセンター的機能充実事業」（3年目） ・言語能力拠点校（2年目）
児童・生徒数	・391名　小学部　中学部　高等部　計 A部門　17名　8名　35名　60名 B部門　97名　66名　168名　331名
教職員数	・201名　教育系　188名（養護教諭　2名、看護師　1名、栄養士　2名） 行政系　13名

参照：都立町田の丘学園ホームページ　http://www.machida-sh.metro.tokyo.jp/mysite1/index.html
（2015.7.23取得）

表２．東京都立町田の丘学園見学実習（平成22年度～平成25年度）

年度	説明会	見学実習	実施内容
平成 22 2010	7/17（土） 10:50 ～ 12:10 講話：安住主幹教諭 資料 A3 裏表 3 枚 アンケート A4 1 枚 ガイダンス：堀内 資料　A4 裏表 1 枚	9/9（水）10（木）11（金） 9:30: 現地集合 12:00: 現地解散 参加学生：計 256 名 （各日：86 名、86 名、85 名） 引率教員：各日 5 名 担当教諭：各日 4 名 （養護教諭 1 名含む）	10:00 ～ 10:10 案内者紹介 参加者Ａ、Ｂグループに 2 分割 10:10 ～ 11:00 Ａを 2 分割し、20 名程度で校内見学。 Ｂは教室にて学校説明 11:00 ～ 11:50 ＡＢ入れ替え ＊学校説明：学校の概要、取組など。（安住主幹） ＊保健室：服薬・学校薬剤師のかかわり（養護教諭）
平成 23 2011	7/15（金） 13:00 ～ 14:30 講話：田中主幹教諭 資料 B4 裏表 1 枚 ガイダンス：堀内 資料　A4 裏表 1 枚	9/9（金）12（月）13（火） 9:30: 現地集合 12:00: 現地解散 参加学生：計 248 名 （各日：84 名、84 名、80 名） 引率教員：各日 4 名 担当教諭：各日 4 名 （養護教諭 1 名含む）	9:30 ～ 10:00 案内者紹介、注意事項確認 10:00 ～ 11:30 Ａ、Ｂ、Ｃに 3 分割し、28 名程度で校内見学。 11:30 ～ 12:00 講話（安住主幹・養護教諭） ・学校と薬のかかわり ・見学を行っての質問や感想
平成 24 2012	7/28（土） 10:40 ～ 12:10 講話：田中主幹教諭 資料 B4 裏表 1 枚 ガイダンス：堀内 資料　A4 裏表 1 枚	9/10（月）12（水）13（木） 9:30: 現地集合 12:00: 現地解散 参加学生：計 265 名 （各日：88 名、88 名、89 名） 引率教員：各日 4 名 担当教諭：各日 4 名 （養護教諭 1 名含む）	9:30 ～ 10:00 案内者紹介、注意事項確認 10:00 ～ 11:30 1、2、3 班に 3 分割し、29 名程度で校内見学。 11:30 ～ 12:00 講話（田中主幹・養護教諭） ・学校と薬のかかわり ・見学を行っての質問や感想
平成 25 2013	7/23（火） 11:00 ～ 12:00 講話：田中主幹教諭 資料 B4 裏表 1 枚 ガイダンス：堀内 資料　A4 裏表 1 枚	9/10（月）12（水）13（木） 9:30: 現地集合 12:00: 現地解散 参加学生：計 250 名 （各日：84 名、84 名、82 名） 引率教員：各日 4 名 担当教諭：各日 4 名 （養護教諭 1 名含む）	9:30 ～ 10:00 案内者紹介、注意事項確認 10:00 ～ 11:30 1、2、3 班に 3 分割し、28 名程度で校内見学。 11:30 ～ 12:00 講話（田中主幹・養護教諭） ・学校と薬のかかわり ・見学を行っての質問や感想

Ⅲ．平成26（2014）年度特別支援学校見学実習

平成26（2014）年度は、本学の夏休み明け授業開始日が１週間早まった。支援学校にとって２学期１週目は、児童・生徒さんが休み明けでまだ十分に学校に適応出来ていないため、本学の見学実習受け入れが困難となった。そのため、初めて後期定期試験後となる2月の4日間に実施した。

見学実習の詳細を表３．表４．表５．に示す。

表３．見学実習ガイダンス

・日　時：平成27年 1月10日（土）13：00～14：30
・場　所：本学１番教室
・内　容：【前半】講話（60分、質疑応答含む）
　　タイトル：「東京都立町田の丘学園の学習について」
　　担　　当：東京都立町田の丘学園　教務主幹　湯川英高教諭
　　資　　料：B4・１枚裏表（パワーポイントスライド20枚）
　【後半】実施要領説明（15分）
　　担　当：見学実習コーディネーター　堀内正子・神戸敏江
　　資　料：A4　１枚裏表（見学日時、集合場所、服装、持ち物、緊急連絡先、注意事項、地図、バスの案内）

表４．平成26年度　昭和薬科大学　東京都立町田の丘学園見学実習案

１．日　　時：平成27年2月 5日(木)・6日(金)・12日(木)・13(金)
２．目　　的：①特別支援学校を訪問し、知的発達や身体に障害のある子供たちがどのように教科学習や日常生活の学習、作業学習、自立活動などを行っているかについて理解を深める。
　　②医療ケアを必要とする子供たちへの対応について理解を深める。
３．対　　象：昭和薬科大学第１学年　238名
４．大学担当：支援学校見学実習コーディネーター　堀内正子（英語研究室）・神戸敏江（薬理学研究室）
５．校内担当：教務主幹（H26　湯川）
６．見学実施グループ

	2月5日(木)59人	2月6日(金)59人	2月12日(木)60人	2月13日(金)60人
1班	Aクラス 1 ～20(20人)	Aクラス 62 ～82(20人)	Bクラス 2 ～21 (20人)	Bクラス 63～82(20人)
2班	Aクラス 21 ～41(19人)	Aクラス 83 ～102(19人)	Bクラス 22 ～42(20人)	Bクラス 83～102(20人)
3班	Aクラス 42 ～61(20人)	Aクラス 103 ～122 (20人)	Bクラス 43 ～62(20人)	Bクラス 103～123(28人)

７．日程・見学内容詳細（各日同様）　＊学校内の行事等で講話等の順番が変更になることがあります。

時間	項目	場所	担当教員				引率教員		
9:30 ～ 10:00	集合：グループ毎に出欠確認。校舎内に移動し注意事項等確認	1階 ホール	湯川他				全体：堀内		
				1班	2班	3班	1班	2班	3班
10:00 ～ 11:30	1班、2班、3班 ３グループに分かれて見学	校舎内	5日	湯川	斎藤	大沼	神戸	山本	土屋
			6日	斎藤	飯山	井上副校長	神戸	秋澤	小野寺
			12日	湯川	斎藤	鷹野副校長	神戸	鈴木	太田
			13日	湯川	斎藤	飯山	神戸	繁田	中村
11:30 ～ 12:00	講話［平成25年度実施例］ ・学校と薬のかかわり ・見学を行っての質問や感想	1　階 ホール	保健講話 ・特別支援学校に在籍する児童・生徒にとって薬とは。 本校養護教諭						
12:00	解散	校舎内							

８．見学コース（予定）
　１班グループ　A小⇒B小⇒自活⇒A中⇒A高⇒B中⇒B高
　２班グループ　A中⇒A高⇒B中⇒B高⇒A小⇒B小⇒自活
　３班グループ　B高⇒A小⇒B小⇒自活⇒A中⇒A高⇒B中

表５．　町田の丘学園見学実習レポート課題

・タイトル：「東京都立町田の丘学園見学実習を終えて」
・内　　容：見学実習を終えて、気づいたこと、考えたこと、疑問に思ったこと、調べたことなどを順番にまとめて書いてください。
・書　　式：A4 １枚 （病院見学実習レポートの書式に準じる）
・締　　切：2月27日（金）
・方　　法：学務システムにより提出

表６．支援学校見学実習を終えての“気づき”

１．支援学校の存在に関して	（ 27名）22.9%
２．施設・カリキュラムに関して	（102名）86.4%
３．児童・生徒に関して	（ 89名）75.4%
４．先生に関して	（ 40名）33.9%
５．薬・薬剤師に関して	（ 90名）76.3%
６．その他	（ 86名）72.9%

Ⅳ．見学実習レポート

前章の表５.にも示したが、学生は概ね２週間以内に、「見学実習を終えて、気づいたこと、考えたこと、疑問に思ったこと、調べたことなど」をA4 １枚にまとめて、本学の学務システムにより提出することが課せられている。

今回は、見学実習レポートの半数（Ｂクラス118名分）に関して、“気づき”を示す箇所を原文のまま抽出し､それらを観点別に大きく６つに区分した。多くの学生の“気づき”は複数の区分に及んでいる。結果を表６．に示す。表６．の区分に従って、学生の“気づき”を示す箇所を紹介する。便宜的に、見学前までの考えのキーワードに波線を、見学後の“気づき”には下線を引いた。

１．支援学校の存在に関して

・私が想像していた閉鎖的な空間とは程遠く、様々な工夫がされた方法で勉強に積極的に取り組む子どもたちの姿を多く見ることができました。
・支援学校にはテレビなどの印象が強くて少し暗いイメージを持っていたのですが、大きく印象が変わりました。
・今まで誤解していたことや、ぼんやりとしか知らなかったことが多くあった。
・初めて訪問したので、とても新鮮でした。間近で生徒たちの日常を見学したからこそ分かることもたくさんありました。
・私は実際に特別支援学校に見学しに行くまでそこに通う子どもたちはどのようなことに興味があって、色々な物事に対してどのような考え方をするのかなと、無意識のうちに普通とは違うと考えてしまっていました。
・初めての見学実習で最初は不安と戸惑いしかなかったが、いい体験ができたなと思った。
・最初は、どんな施設なのか病院のようなところなのかと思いました。入ってみて感じたことは普通の小学校に来たように思いました。

・私は高校生の時から特別支援学校の生徒さんと結構関わっていて、こういった学校の中を見学するのも初めてではないが、学校によって体制も違えば、雰囲気、特色も違う。
・私の通っていた小中学校では、障害者のためのクラスや支援学校への訪問などがあったため、今まで障害者と向き合う機会はあった。障がいのある子については色々理解しているつもりでした。ですが今回の見学では、まだまだ自分の知識が足りないことを教えられました。
・私の姉は養護学校に通っていたので、ある程度の設備は予想していましたが、特別支援学校と養護学校は異なる点があり、とても新鮮な経験でした。
・高校の時、障害をもつ子との交流はありましたが、普段障害をもつ子がどのように学校で生活しているのかは知り得ませんでした。
・様々な配慮や工夫。幼稚園や小学校に通っていた時のことを思い出しても、そのような工夫がされていた記憶がありません。あの時同じように通っていた障害を持っていた友達は大丈夫だったのか、改めて疑問に思いました。

２．施設・カリキュラムに関して
・柔らかさの段階全4種類の給食が、種類毎に作り分けているという事実を知って大変驚いた。
・てすりが設置されていたり、スロープなどがとりつけられているなど色々なところに気配りされている
・トイレや体育館などの場所を生徒にわかりやすく図でしめしてあったり、廊下は車椅子が動きやすいよう広くなっていたりととても過ごしやすい
・A部門・B部門と分けており差別を避けるためにこういった呼び方をしていた。こういった言葉においても細かな所にも配慮がされていて、生徒たちを慎重に扱っているのだなと印象をうけた。
・私達が通っていた学校と病院とが合わさったような場所だと思った。飲み薬の管理はもちろんのこと、温度や湿度にまで気を配っていた。
・感染症に対しての普通の学校に比べより警戒している。
・生徒さん方が学業に専念しやすいように（カリキュラムも）工夫されていて，とても生徒さん方に優しい学校であると感じました。
・子ども達に情報を与えて，そこから自分たちで考えさせて行動させる、という教育の形はすごくいいなと思います。
・今まで見てきた支援学校の中でも学年別や障害別に分けたクラスが多く、とても規模が大きい。細部に渡り生徒が気持ち良く学校生活を送るための工夫がされている。
・学習能力を高めるだけではなく、自立活動といったコミュニケーション能力を高めることに力をいれていて、将来企業に就職する上で必ず必要になるので、とても役立つと思いました。
・環境の整理だけではなく生徒とのコミュニケーションも大事にすることで、それぞれのケアにあたっているのだと気付けました。

３．児童・生徒に関して
・見た目では、何か不自由をわずらっている人には見えない。真剣に先生方の話を聞いて、与えられた課題に夢中に取り組んでいて
・これほど多くの障害を持った生徒が身近に生活しているのだと驚いた。

・子供たちが持つ障害は様々。生徒一人一人に対応が必要
・身体の方が薬を多く必要とするのかなと思っていたのですが、実際は知的の方が薬を多く飲んでいることが多い
・生徒たちとちゃんと触れ合って会話をする機会があった時に口をはっきりと動かせない子がいたのですが、挨拶や簡単な質問をした時に口を少し動かしたり、必死に目で訴えてきたり言葉ではなく心と心で通じ合えた気がして凄く嬉しくて暖かい気持ちになりました。
・考えを改めました。知的障害のある子どもたちも私たちと同じように同じことに興味があって、同じように生活しているなと感じました。
・私は正直こういう子たちは運動できないし、したくないのではないかと思っていましたが、みんな明るく楽しそうにやっていたのが印象的
・支援学校＝知的障害=コミュニケーションの取れない人が多くいるという思い込みの間違い。肢体不自由の人の中には英検に合格した人もいる。
・実際に障害をもった子供たちを見て体に不自由をもったにも関わらず元気に授業を受け積極的に行動をしていた風景に驚いた。
・学校の生徒たちはとても礼儀正しかったのも記憶によく残っている。

４．先生に関して
・授業風景を見ていて、先生が生徒に対してどこまで手を差し伸べてあげるか判断することはとても難しいことだと感じました。
・先生たちが生徒たちをことあるごとに褒めていたことが印象に残っています。褒められた子供もとても嬉しそうに笑っていて、見ている私まで嬉しくなってしまった。
・障害の程度が一人一人違うため、一人一人にしっかり向き合って接し、お互いに信頼関係を築くことが大切
・自立活動についても個々に合ったプログラムで、保護者や先生を含め様々な専門家がサポートしていることに驚きました。
・先生は動いている目と顎だけでその人の表情や感情をよく読み取っていたので、とても驚いた。
・先生は一人ひとりをよく見て小さな変化も見逃さないことが大切だと教わりました。
・やはり見学して思ったのだが、普通の小中学校および高校の教員と比べて、精神的、肉体的なきつさは桁外れに高い。
・想像していた以上に、（生徒一人一人に対応した）、たくさんの工夫と、教員の方の努力がありました。
・先生方は常に生徒たちのことを第一に考えているということです。これはどの職業にも共通することだと思いました。
・若い先生たちがたくさん動いてがんばっている姿を見て、（障害を持った人を見て見ぬふりをしてしまったりせず）、私もこのようなことに向き合っていくべきだと思いました。

５．薬・薬剤師に関して
・障害を持った子も毎日たくさんの薬をのんでいること。障害を持った子供たちには服薬にも配慮が必要、保護者にもより安心してもらえるような薬剤師になりたいと、新たな理想の薬剤師像ができました。

・今までの実習では患者が老人であることを前提としたお話が多かったが、今回のような障害を持つ小さな子供が対象となる場合もあることに気付かされた。
・薬剤師は薬に対する知識だけあれば良いというものではなく人に対する気配りやコミュニケーション能力が必要になってくるなと今回の実習で再認識させられた。
・私たちも医療の薬の分野だけでなく、視野を広げ、さらに活動範囲も広げて患者さんに寄り添える、社会にとって重要な存在になりたいと感じた。
・薬局薬剤師や病院薬剤師といった限られた道だけではなく、薬剤師として教育に関わることも出来るのだと、新たな可能性を発見することが出来た。このことは、今回の見学においての最大の収穫である。
・薬剤師はこのような学校でも活躍しており失敗の許されない仕事であり、薬剤師の責任の重大さを痛感した。
・薬剤師の仕事、環境衛生や感染症対策の大切さを学んだことは、私の中で大きな一歩となった。
・将来の職を見つめて、もう一度自分に今何が求められているのかについて考えたいと思った。
・学校薬剤師という職業は初めて耳にするものだった。薬学部を卒業しても色々な選択肢を持って就職活動をしたい

６．その他
・世の中で必要不可欠なことでも、自分と関係の無いことに対しての知識が全くないことが改めてわかり恥ずかしく思いました。
・今回は、あまり直接は触れ合うことができませんでしたが、何か機会があれば直接触れ合いたいと強く感じました。
・（障害を持った方（自閉症の従兄弟）に）今まで何も考えず普通に接していましたが、気を付けなければいけないこと、もっと工夫しなければいけないことがまだまだたくさんあるのだなと気づかされました。
・「障害を持っているから不幸せで持っていないから幸せ」という意見を耳にすることが今まであり見学実習中に浮かんだが、障害を基準にする見方は誤っていると感じた。その人自身または周りの人々が環境を変化させることによって、日々の生活の充実度を変えることが出来るのではないかと思った。
・特別支援学校が増えて障害のある子どもたちが快適な環境で将来に向かって勉強ができるようになればよいと願います。
・多くの人が特別支援学校の様子を知り、生徒のより良い生活につながれば良いと思います。
・将来私の子供に、もし知的や身体に障害があったらどうしようと考えました。普通の学校（支援学級）に通わせる手段もあると思いますが、町田の丘学園のような充実した施設が近くにあったらそういうところに通わせたい
・障害者が、勉強しやすいまたは働きやすい環境を少しずつ増やしていくことは今後の課題である。
・私がいつも何気なくやっていることでも、やることが難しい人たちが多くいる。
・今回の実習を通して学んだことを活かして人のことを考えて行動できるようになりたい。

Ⅴ．考　察

学生のレポートからは、直接自分の目で見る・触れる体験のインパクトの強さが見て取れる。時間的には２時間に満たないが、その内容は学生にとって大変充実したものと言える。事前学習において、間接的ではあるが支援学校がどのようなところか、児童・学生はどのように勉強しているかを学んだが、実際の見学実習を通して、瞬時に思い込みや偏見が打ち砕かれ、人の痛みが自分の痛みに変えられていることがわかる。支援学校の存在や教師の児童・生徒に対する真摯な態度は、“８つ星薬剤師”[2]の「教育者」としての役割を医療系以外の他職種の専門家から学ぶことが出来ることを私たちに教えている。また、見学実習後のレポート課題は、学生に内省のチャンスを与えている。学生の“気づき”には個人差が大であるため、ＳＧＤなどによる“気づき”の共有が必要である。

Ⅵ. 結論

町田の丘学園における見学実習プログラムは、今年10年目を迎える。代々の校長先生や担当教諭の方々のご理解とご協力で、本学の１年生にすばらしい“気づき”の時が与えられていることは確かである。学生たちに蒔かれた種が成長して花が咲き、実を付けられるように、よりよいプログラムの開発と継続的なプログラムの提供が必要である。

これまで、本学引率教員と担当教諭との意見交換から、様々な交流が行われてきている。例えば、町田の丘学園では、ＰＴＡ主催の「夏の学校」が３日間行われるが、そこでは子供たち一人に一人のボランティアが付くことになっている。これには本学の学生や教員、堀内も参加している（一緒に音楽を聞いたり、フラメンコを踊ったり）。また、町田の丘学園の重度肢体不自由の生徒さん（４名）が、町田市が主催する障害児スポーツ教室（毎土曜日午後・サン町田旭体育館）に参加するのを支援している（一緒にトランポリンに乗ったり、体操したり）。本学の複数の教員や研究室の学生たち、堀内も参加している。交流は、ボランティアだけではなく、本学で若手教諭の研修を受け入れたり、町田の丘学園で開かれた公開研究協議会に参加し、支援学校への理解を深めている。

今後の課題として、学生や教員へのボランティア登録、行事への参加を積極的に紹介すること、同時に本学の多くの教員が本実習に対する理解を深め学生教育に寄与する必要性が挙げられる。

本学は町田市にある唯一の医療系大学である。今年８月には、本学で初めての寄付講座（地域連携薬局イノベーション講座）が立ち上がった。串田寄付講座教授は、これまでも様々な分野で“地域連携”を推進して来られた。それらは、次世代の教員たちに引き継がれている。この秋、堀内研究室からも新たに３人の４年生が、「第６回福祉フェア」（平成27年10月18日、町田市成瀬）や「2015町田夢舞生ッスイ祭」（認知症の方やご家族とソーラン節を一緒に踊り歩く）にボランティアデビューを果たした。さらなる連携を目指して、新たなプログラムの開発が模索されるが、早期体験学習の一つである町田の丘学園での見学実習が、これらの入口として必須の役割を占めていることは間違いない。

＊本稿は、日本社会薬学会第34年会（2015年、熊本大学薬学部）においてポスター発表した内容を柱に大幅に加筆したものである。

注

１　古澤　忍（2010）、「薬学教育６年制における早期体験学習―生命の尊さと医療の関

わり―」,『高等教育　ジャーナル：高等教育と生涯学習』17，95 - 98.

2　医薬ジャーナル編集部の前田健一郎氏は、「薬学教育モデル・コアカリ改訂の目指すもの―国際標準“８つ星薬剤師”輩出のために―」『医薬ジャーナル　2014年5月号（Vol.50 No.5)』で、次のように説明している。「(世界保健機関）は2000年に、真に有能な薬剤師の理想像として、“７つ星薬剤師”という概念を提唱した。その定義は、「ケア提供者（Caregiver)」、「意思決定者（Decision-maker)」、「情報提供者(Communicator)」、「管理者（Manager)」、「生涯学習者（Lifelong learner)」、「教育者（Teacher)」、「指導者（Leader)」、という７つの能力を兼ね備えた薬剤師こそ、本当の意味で有能な薬剤師、というものであった。／そして2006年には、WHOは８番目の能力として、「研究者（Researcher)」をそこに追加した。」